

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.11 2009年7月号

- 「きたないもの」ってどんなもの? 菅原 正則
- いすが動いた... 藤田 博
- ティラノサウルスの「こころ」. 遠藤 奈保子
- 大切なものの存在に気づかせてくれるこの一冊 菱川 真理子
- 新刊紹介 藤田 博

「きたないもの」ってどんなもの？

菅原 正則

ゲロ、鼻くそ、ウンチ、ゲリ、おしっこ、つば、鼻水、耳くそ、ニキビ、水ぶくれ、ふけ、かさぶた、目やに、歯くそ、おなら、げっぷ、あせのにおい、口におい、くさい足。いきなりこんな言葉を矢継ぎ早に目にして、不愉快な思いをされた御仁もおられると思いますが、これらはここで紹介する『きみのからだのきたないもの学』という絵本の目次です。これらは、ぬるぬるべたべたしていたり、茶色や黄色や緑やどす黒い赤だったり、猛烈に臭かったりするので、ふだん忌み嫌われるものばかりです。あるいは、「下ネタ」として茶化す対象にしてしまうこともあります。

この本では、このようないわゆる「きたないもの」を、人ならば誰の体からも生じるものとして、小学生くらいなら分かる平易な言葉で科学的に解説しています。しかもその具体的な成分や体の中での役割をあげながら、どちらかといえば好意を持って書き記されているので、読み進めるうちに、これまで闇雲にそれらを排除していた私たちの日常感覚が変わるような気がしました。例えば、体から出たばかりの健康なおしっこには細菌が含まれていなくて「きれい」だということを訳者はあげています。私自身は汗っかきなので、思春期の頃から汗くさくなりたくないばかりに、どうしたら汗をかかなくて済むかと悩んだ時期もありましたが、汗そのものが臭うのではないことや、汗をかくことの大切さがこの本で改めて確認できました。



私は日頃、建物をめぐる熱や空気、エネルギーについて興味関心を持ち研究を進めていますが、それら物質やエネルギーの流れを追いかけてゆくと建物周辺の人体やそれよりもスケールの小さいもの(微量物質、微生物、微気象)、そしてスケールの大きいもの(地域社会・気候風土、そして地球環境)にまで意識が及びます。ただこの中で地球だけは特別な存在といえます。それは現代の文明レベルにおいて、地球は物質的に完結しているからです。人体や建物などはその環境を維持するために必要なもの(資源)を摂取し、不要なもの(廃棄物)を放出することができるのに対し、地球だけはそれができないからです。このことから、地球内では物質循環を淀みなくする(廃棄物を再生処理して資源化する)のがとても重要であり、そのために最近では廃棄物もできる限り分別回収される訳です。一昔前はすべて「ゴミ」と呼び、得体の知れない、何の役にも立たない、もしかすると害をもたらすかも知れないとされていたものを、分別し正体を明らかにすることによって資源性が生じるのです。このことは、「きたないもの」にも当てはまりそうです。「きたないもの」を「汚物」と思っているうちは、顔を近づけて見たり、におったり、触ったりするには心理的に抵抗があり、たいていはチリ紙で拭いてまるめてさっさとゴミ箱やトイレに捨ててしまうでしょう。でも「きたないもの学」の対象となれば、よく観察して正体を知り、もしかすると何かに利用できるかも(かの時代におしっこで洗濯をしたように)と考えを巡らせるようになるかも知れません。

子供たちは、片言しか話せないうちから、「きたないもの」の言葉やそれが指すものをいち早く覚え、遊びにしていまいます。赤ちゃんなら正常にウンチやげっぷをするとむしろ褒められます。この本をわが子たちに見せたところ、絵のおもしろさも手伝って大盛り上がりで、しまいには最も気持ち悪くて見るのも嫌な(と言いながら一番興味をそそる)絵のページを持って、互いに追いかけて回すはめになりました。こういう姿を見ると、「きたないもの」への偏見を無くすのはそう難しくないように思えます。

個人的には、お父さんたちの悩みのタネである水虫、タン、加齢臭、いびき(?)を題材にした第二弾の刊行を待望する次第です。

「きみのからだのきたないもの学」シルビア・ブランゼイ・文ノジャック・キーリー・絵ノ藤田絃一郎・訳ノ講談社
(家庭科教育講座)

いすが海を見つづけています。病院のベッドからひろくんがそのいすを見ています。山下明生・渡辺洋二絵『はまべのいす』（あかね書房）です。見ているいすを見ているひろくんの二重構造は、入院中でそうするしかないひろくんによってつくられるもの。早く退院し、外に出たい、その思いが強ければ強いだけ、いすへのまなざしも強くなります。かもめがいすの周りに集まってきます。あかちゃんを抱いたお母さんが座ります。黄色いちょうちんが止まります。学校帰りの子どもたちには、馬になったり、自動車になったりします。いすの周りに集まるそうした人やものにつながりはありません。一つのいすが引き寄せ、それによってつながりが生まれるのです。「はまべのいす」であるのは、浜辺が境の空間、それ故に出会いをもたらす、変身をもたらす空間だからなのです。



おおきいの、ちいさいの、ふるいの、あたらしいのとたくさんのいすが砂浜にやってきます。その点で、妹尾猶作・ユノセイイチ絵『いすがあるいた』（こぐま社）は、『はまべのいす』と同じ形になっています。「いつも こしかけられてばかりいるから きょうは みんなで こしかけっこをやりようよ。」のさかさまの遊びが行われるのは、そこが変身の空間だからに他なりません。朝食のためいすに座ろうとして、「おや ぼくの いすに こんなものが。」ときれいな小石を手にする男の子、「あら わたしのにも。」ときれいな貝がらを手にする女の子は、寝ている間にいすが砂浜まで歩いていったことを知らないのです。



森山京作・スズキコージ絵『いすがにげた』（ポプラ社）は、「おや、まあ、いすが ない！」のおばあさんの驚きに始まります。のらねこが、「あいつなら、さっき にげてった」と教えてくれます。「いすが にげるなんて、そんな・・・」とおばあさん。ぶたが、「ついさっき、おれを またいで、あっちへ いった」と教えてくれます。「いすの ぶんざいで、にげようだなんて」とおばあさん。うさぎが、「たったいま、すれちがったとこさ。」と教えてくれます。「なんて、ひとさわがせな いすだろう。」とおばあさん。おばあさんから逃げようとしたいすは、川の泥にはまって動けなくなり、それを引き上げようとするおばあさんは、いすもろとももんどりうって倒れ込みます。二人並んで横になって、おばあさんは、「おまえとも、ずいぶんながいつきあいになるねえ」と言います。そう言ってなでさするのです。「うんと、とっちめてやらなくちゃ」が、なでさするへ変わるのです。

おばあさんは、「とっとと いておしまい」、そう言っていすを行かせます。家に戻ったおばあさんが驚きの声をあげます。いつもの場所にいすが戻っていたのです。いすに座ったおばあさんは、すぐに寝息を立て始めます。話しの終わりが夢の始まり、ということは、終わりが始まりへと戻り、全体がおばあさんの夢の中であったことを示すものかもしれないのです。

香山美子作・柿本幸造絵『どうぞのいす』（ひさかたチャイルド）にあっていすは動きません。動かないいすが、動かないことによって動きをつくり出すのです。ろばはそこに座る代わりにどんぐりの入ったかごを置きます。どんぐりを食べてしまったくまは、「からっぽにしてはあとのひとにおきのどく」と、代わりにはちみつを置きます。はちみつをなめてしまったきつねは、「からっぽにしてはあとのひとにおきのどく」と、代わりに焼きたてのパンを置きます。「からっぽにしてはあとのひとにおきのどく」と、代わりにくりを置いたのはパンを食べてしまった10匹のリスです。昼寝をしていたろばが目をさまします。どんぐりがくりに変わった、ろばの目にはそう見えます。ろばは木の下で眠っていました。次々とやってきて「交換」して去っていくのは、ろばの夢の中のことでない、現実となります。現実であることが強調されることによって、後の人のことを思う思いやりが強調されているのです。いすを作ったのはうさぎです。うさぎは「どうぞのいす」の立て札を立てることを思いつきます。このときうさぎは、「どうぞのいす」に二つの意味があることがわかっていたのでしょうか。



「はまべのいす」 山下明生・作 / 渡辺洋二・絵 / あかね書房

「いすがにげた」 森山京作・作 / スズキコージ・絵 / ポプラ社

「どうぞのいす」 香山美子・作 / 柿本幸造・絵 / ひさかたチャイルド

（英語教育講座）

ティラノサウルスの「こころ」

遠藤 奈保子

私が「ティラノサウルス・シリーズ」の絵本に出会ったのは、以前勤めていた小学校の校長先生が、朝会で読み聞かせをしてくれたときでした。涙が出そうになるのをぐっとこらえて聞いていたあのときから、私の大好きな絵本になりました。幼稚園の年長さんにも、小学生にも、読んであげたいと思っている絵本です。その中の1冊『きみはほんとうにステキだね』を紹介します。



こわくてらんぼうもののティラノサウルスは、ある日、スティラコサウルスたちを追いかけているうちにガケから海へ落ちてしまいます。

泳げないティラノサウルスがそのまま死んでしまうんだ、と思ったそのとき、エラスモサウルスがティラノサウルスを助けてくれます。エラスモサウルスの優しさに心があたたかくなったティラノサウルスは、エラスモサウルスから、「りくの うえにも ティラノサウルスって、とっても こわくてらんぼうものの きょうりゅうが いるんでしょう？」と聞かれると、「お、おれは…ティラノサウルスなんて知らない！」と、うそをついてしまいます。

「よかった。ぼくは、きみみたいな やさしい きょうりゅうに であえて。きみは ほんとうに ステキだね。ともだちも いっぱい いるんでしょう？」

「あ、ああ。おまえは？ ともだちは？」

「ともだちは…いない。」

「じゃあ、おれが ともだちに なってやる。あしたも ここで あおう。」

ティラノサウルスは、自分の正体をかくして、エラスモサウルスと友達になります。ティラノサウルスだって、本当は、友達なんて一人もいないのです。

それから二人は、毎日、毎日会い、いつしかティラノサウルスは、エラスモサウルスといつまでもいっしょにいたいと思うようになります。しかし…。

ちょっぴりせつなくて、でも、なんだか心があたたかくなるラストが待っています。

ティラノサウルスは、こわくて、らんぼうもので、いじわるだと思われているけれど、本当は優しく、寂しがり屋で、大好きな友達を大切に思う心をもっています。

一見、乱暴者で、意地悪なことをしていても、本当は優しさや素直さを持ち合わせた純粋な心の持ち主だった…そんな人に出会ったことがある人、少なくないのではないのでしょうか。また、そういう相手の優しさに気付くことができるのも、とてもすてきなことだと思います。

幼稚園や小学校に通う子どもたちにも、ティラノサウルスのような純粋さや素直さ、優しさをもって、感じて、成長して欲しいと願っています。絵本を通して、子供たちがティラノサウルスからいろいろなことを感じ取って、心を豊かに育てていくお手伝いができたら、教育に携わる者としてはとても嬉しいことです。

この絵本は大人にも人気があります。ティラノサウルス・シリーズは、この他にもたくさん出版されています。ぜひ、お気に入りの1冊を見つけてみてください。

「きみはほんとうにステキだね」宮西 達也作・絵ノポプラ社

(附属幼稚園 4 歳児担任)

岡田 淳『人類やりなおし装置』(17出版)

菱川 真理子



「で、その人類やりなおし装置というのは、どういう働きをするのです？」助手の「ぼく」が教授に聞きます。いつもはいきあたりばったりの研究ばかりしている教授が、今回に限っては様子が違います。「人類は、花と緑のなかで、もういちど最初からやりなおすのじゃ」と、どうやら本気で人類のための研究をするつもりようです。「人類やりなおし装置」から出る波に触れたものは、すべて植物に変わります。銃も、ロケット弾も、戦車も、自動車も、お金も、学校も。「ぼく」は「なんにもかもまとめて、いっぺんに、ぱっと解決」できるこのアイデアに舌を巻きます。世界をつくる神様にでもなった気持ちになるのです。

研究を進めるにつれて、教授は何度も壁にぶつかります。いつもなら、一度失敗すると止めてしまうはずが今回はへこたれません。その研究の途中、「ぼく」は気づくのです。水道、トイレ、病院、空気、人間...「とりかえしのつかないものを花や木にしてしまうのではないかと」「ぼく」は植物にしてはいけないものを書き止め始めます。「もうほかに植物にしてはいけないものはないか」、そのことしか考えられないようになってしまいます。「ぼく」には、自分たちのしていることが「罪もない人を、いっぺんに、ぱっと殺してしまう」と思えてきたのです。「人類やりなおし装置」は完成します。それでも研究は失敗に終わります。

「生きていくのに必要なもの」を誰でも一度は考えたことがあると思います。しかし、考えれば考えるほどたくさん浮かんで来て、行き詰ってしまいます。なくてはならない大切なものは数え切れないほどたくさんあるからなのです。そしてそれは一人ひとりみな違います。世界中に自分とは違う人が数え切れないほどいて、それぞれに数え切れない大切なものがある。数え切れないものは、数えられないのです。その数え切れないものを数える「ぼく」は、私たちに「世界中の人それぞれがもっている大切なものの存在」を教えてください。自分に大切なものがあるように、誰かにも大切なものがある。そう考えることで、優しくなれる気がしてきます。「人類やりなおし装置」がすべての人の心をリセットしてくれるのです。

(数学教育専攻3年)

新刊紹介

ルース・ソーヤー文／ロバート・マックロスキー絵／こみやゆう訳『ジョニーのかたやきパン』(岩波書店)

おばあさんのメリーは、働きながらいつもお気に入りの歌を歌います。「それ いそいでおくれ、フライパン！わたしのおとくい かたやきパン！...」おじいさんのグランブルは、名前の通り、いつもぶつぶつ言いながら得意の仕事をしませす。手伝いのジョニーは、いつもお気に入りの陽気な曲を口笛で奏でます。三人は「まるで うさぎが いごちのいい すでくらすように、へいわに くらしていました。」ところが、にわとりがきつねにさらわれ、ひつじがおおかみにさらわれしてしまったことで、ジョニーにひまを出さなければならなくなってしまいます。



別れに当たっておばあさんが、ジョニーにかたやきパンを作ってくれます。そのパンが坂道を転がり始めます。ジョニーが追いかけます。うし、あひる、ひつじ、ぶた、めんどり、ろばが順に加わります。坂にさしかかると、パンがあえぎます。ジョニーもうしもあひるもひつじもあえぎます。「みんなは はあはあ いきを きらしながら、まつばやしのまえを ぐるぐる まわりました。」気がつくとジョニーは家へと戻っていたのです。うしが、あひるが、ひつじが...作り上げる積み重ねと、積み重ねられたものが大きな輪を描いて元に戻ることが核になっています。ジョニーにひまを出した、出さざるを得なかったことが、さらわれてしまったり、いなくなったりしてしまった、にわとりやひつじやぶたを連れ帰ることにつながっているのです。

これが『おだんごぱん』と比較可能なのは言うまでもありません。瀬田貞二訳・井上洋介絵『おだんごぱん』(福音館書店)、瀬田貞二訳・脇田和絵『おだんごぱん』(福音館書店)の二つは、同じ訳に違った絵をつけたものです。ポール・ガルドン『しょうがパンぼうや』(ほるぷ出版)も、イギリスの昔話“Johnny-cake”も同じ形になっています。ここでは、逃げるおだんごぱんが主人公、そこからは追いかけるジョニーを主人公とした『ジョニーのかたやきパン』との違いが見えてきます。おじいさん、おばあさん、うさぎ、おおかみ、くまを追い抜いてきたおだんごぱんは、いつでも相手と一対一の関係にあります。次第に数を増していく『ジョニーのかたやきパン』との違いです。足を止めたおだんごぱんが、狡猾なきつねに食べられてしまう話の終わりは、後味の悪さを残しています。それがないことが、うしとあひるとひつじ...を連れ帰ったジョニーと一つなのは言うまでもないのです。

(藤田 博)

発行: 宮城教育大学附属図書館